

なつめ縫製所を訪ねて—夏目奈央子さんに聞く—

インタビュー 赤木重文・大内啓子

夏目さんに最初に会ったのは、第64回日本色彩教育研究会本部研修会でワークショップをお願いした折である。ワークショップは「装いと色・かたち」というテーマで、手塚千尋さん（東京福祉大学短期大学部こども学科助教）がファシリテーターとなり2人で進められた。打合せのときに興味を持ったのは、夏目さんが大学では建築を学び、現在「なつめ縫製所」を主宰されていることである。夏目さんから「人間を包み込むという意味では建築も衣服も変わらない。人間を包む一番近い素材である布に着目し、建築内装から衣服まで暮らしに生きる布を扱う活動を行っている。」と聞いて、その活動の一端でも身近で体験してみたくなり、今回「なつめ縫製所」を訪ねた次第である。以下、その訪問記である。

赤木：今日は、お忙しいところありがとうございます。では早速、お仕事の内容を説明してください。



夏目：扱う素材は布です。建築を勉強していたということもあり建築で使用する布ですとか。少し遡りますと、私の卒論のテーマが、衣服と建築ということで、ずっと研究をしていて、服も建築も変わらないのではないかとこの観点で思っていたことをまとめました。そこが大きい転換点だと思います。

大内：どうして建築のご出身なのに縫製なのだろうかと思っていましたが、それは大学時代から始まっていたのですね。

夏目：そこが根っこになっていて、着る物があって、空間があって、建築があってという自分を取り囲む環境としては全て同じなのではないかという考えです。そして、それ全てが暮らしといえるのではないかと。そうした時に、では私にできることはなんだろうかと考えた時に、私は布が得意だなということで、布を使って人の暮らしを彩りてつくっていったらいいなというところが始まりです。

赤木：布との出会いというのは古いのですか？

夏目：古いです。母と祖母がずっと、趣味でパツ

チワークをしていたというのがあって、家の中が針と布だらけというところで育ちました。そこが原点と言ったら原点です。

赤木：製品づくりの基本姿勢はありますか？

夏目：基本的にはカタログの無い縫製所と言っているのですが、「これらのうちの、どれを作りますか？」ということではなく、相手とお話をしながら、相手を知ってから「では何を一緒に作っていきこうか」というところから始まっていきます。ゴールとして、ものを作って終わりにするのではなくて、「何をつくらうか」といったお話し合いや、相手と時間を共有したり、そういうところから、ワクワクやドキドキを楽しんでいけたらと思ってやっています。ですから、ゴールにしているのはものを作るだけではなくて、その人との時間を楽しみながらとか、その人の今後の人生なるべく楽しいものにしてあげるとか、そういう事をいつも頭に入れていきます。

赤木：使ってくださる方とか、注文して下さる人との最初の出会いというのは？例えば、「このモノがほしいわ」というカタログ的なものではなくて、先ほどおっしゃられた、ある種ふれあいの中から、一緒にこの物を作っていこうというようなことのように。最初の出会いから、どういう形でものづくりに向かっていくのでしょうか？

夏目：それは、今でも私の課題なのです。初めの第一歩をどういうふうにもこちらも考えていったらいいのかが課題です。これまでは知り合いの方がお願いして下さったり、友達がお

願いしてくださったり。後は、ネットを見ましたということで、本当に顔も知らないような方がお願いしてくださる場合もあります。どういうふう知り合っというのは未だに課題です。

赤木: 過去の作品で解説をしていただけますか？

夏目: 大学の同級生で、つみき設計施工社の河野さんと一緒にお仕事することも多くあります。河野さんが建築を作り、そして今度は“そこで着る洋服がほしい”という事になり、そこから私の仕事になるという流れもあります。

大内: まさにデザインなのですね。建物から衣服、人の生活までデザインしていくということですね。



夏目: この時に依頼された方は、河野さんのブログやHPを見て、事務所とすぐ近くの間所ということもあり、すぐをお願いしたいということになりました。

この方が、私と河野さんとで計画を進めていったものになります。お住まいになっているマンションの別の部屋を借りて、奥様の絵のアトリエにしたいということで、お話を頂きました。極普通のマンションの一室なのですが、解体から始まって一つ一つの全ての建具は取り払い、ひとつながりの空間にしたいというようなお話をしながら、ここを改造しました。改造プラス、部屋の中の布の設いは私が担当してということを進めていきました。

大内: 今のカーテンなども夏目さん作ですか？



夏目: そうです。ここは窓枠のまわりに本棚を作ってその窓に布をかけて遊べるようにしました。向かい側にはB0だと思いますが、一番大きな紙のサイズが入る棚を特注で作りつけて、本当にアトリエの様になっています。

そして、普段使いではないのですが、キッチンも取り付けました。この辺も一緒に考えて作っています。

この布で作った仕切りも、棒ごと動かせる様にしているので、好きな場所にすだれのようにして、一枚だけ掛けたり、ねじったり絞ったりできるようにしています。これも一緒に考えたものです。



大内: このクッションもそうですか？

夏目: そうです。床に使用しているカリンという木材が少し冷たかったので、座布団があったらいいかなというのをお施主さんと一緒に考えました。デザインはお任せしますということだったので、藍染めのろうけつ染めを初めてそこでやってみました。丸の模様や四角の模様と言った感じです。

赤木: 撮影しているいいですか？

夏目: お施主さんが、建築を作るという時間と空間を一緒に楽しんでくださる方で、一緒に作る、ともに作るということでやっていこうというお考えだったので、壁塗りも一緒に参加してもらったりだとかしながら、毎日毎日、今日はどこをどうやって行くのだろうか？ということを楽しみにして下さるお施主さんでした。

赤木: 何をされている方ですか？

夏目: この方は趣味で絵を書かれている方で、お仕事は特にはしていらっしゃいません。絵だけではなく、色々を作ったりするということがあったので、それを存分に楽しむアトリエということで作りました。

大内: そういうアトリエ欲しいです。

夏目: すごくここはいいですよ。

夏目: この時点では何もなくてガランとしていま

すが、今では、筆や絵の具や本などたくさん入っていて、とても素敵なアトリエになっています。

この方は同じ年の女性で左官職人さんなのですが、玄関の土間や壁をやってくださいました。

大内：かっこいいですね

夏目：はい。作業となると真剣な眼差しで、かっこいいです。

そのお施主さんは書道もされるということで、書道をするときに汚れてもいいけれども可愛い作業着がほしいという依頼がきました。「動きやすいように両足がさばけるように、ここまでスリットを入れて欲しい」とか、「袖も手が楽に上がるように、ふわっとするように」など、一から相談をしながら作っています。ですから、今では空間から衣の方に移っています。これが、いま作成中の作業着です。足が前後に開くようになっていて、ポケットがあって、墨が飛んでも気にならない紺色がいいということで、一つ一つ要望を聞きながら作っています。

本当に、その方の住む空間から、衣服まで、衣食住を一緒に作っているようで、私達も作っている時の喜びが大きいです。



赤木：本当に丁寧ですね。

夏目：この方と知り合ったのは去年の夏でしたが、今までにアトリエ、土間、玄関を行い、次に旦那さんの書斎を作りたいということで、今度それがプロジェクトとして待ち構えています。

大内：このような染も昔から自分の近くにあったのですか？

夏目：染は初めてでした。

大内：すごいチャレンジ精神ですね。

夏目：染め用のキッドが売っているのので、それを鹽だけ買ってくれば良いという形なので、す

ごく楽しめました。

大内：楽しみながらできるというのはいいですね。

夏目：そうなのです。お施主さんから、ぜひここで挑戦してくださいと言われて。失敗しても、それはそれでいいですからチャレンジしてくださいというお施主さんでした。

赤木：この模様は、挟み込んでやったのですか？



夏目：そうです。割り箸で巻いて、挟み込んでクルクルと巻いていきました。ですから、中に行くほど薄い色になっています。

赤木：風合いがありますね。素材感が。これにしてもいいですね。

夏目：お施主さんが、きちんとした美意識というか、本当に素材の美しさを見極める方で、木の無垢がいいとか、左官の砂の感じがいいとか。世の中には柄の布は山ほどあるのですが、それを使うのではなく、ここにある白い布も、微妙に白の色が全て違います。柄だけで違うというのではなくて、手触りや透け感などで表情が出せないかというのを実験させてもらいました。そこで、このクッションの模様も、なつめオリジナルということで、染を採用しました。



赤木：実際のアトリエをみてみたいですね。

夏目：使われているところを見ると、作ってよかったと、本当に楽しんでもらっています。

赤木：自分のものとして、自分で発想して自分のものを作るというのはないのですか？それをサイトに載せてみるとか。

夏目：していないのですが、趣味は自分のものを作るなので。それは学生の時からそうです。



丸いカバンが欲しいと思って作ったのがこれです。今はケーブル入れにしています。ずっと趣味でやって来たことを今仕事にしているので、今は仕事中心になっていますが、自分のものを作るというのは楽しいです。ヒッチャカメッチャカでも誰も何も言いませんから。

これも、今後の課題なのですが、自分のハッとした発想でものを作るというのはやはり好きなので、今実験的に、ネットショップを立ち上げているのですが、今後もやっていきたいと思っています。このカバンは一本でできているものをグルグルと巻いていって、持ち手まで一本で成り立っているというものです。HPやネットで紹介していただければいいなと思っています。空間だったり、手に乗るものだったり大小様々な色々なスケールのものを行ったり来たりするというのが楽しいです。



大内：扱う素材というのは、自然系のものが多いのですか？

夏目：布がひとつ軸にあるので、それと相性が良い物を選んでいきます。こういう全く相反するプラスチックを持ち手にしたりとか、素材を常に目に光らせています。糸と布の類はたくさん集めています。

赤木：色使いを見てみると、ワンポイントというか、アクセント的なものがずっと入っていますが、それは意識されているのですか？

夏目：ちょっと違ったものがほしいというのは奥底で欲しているのかもしれませんが。

赤木：自然に選んでしまうのですね。

夏目：これは着物の帯ですが、なにかキラっとしたもののや派手な色が、というのは目が行きやすいです。



大内：この素材・材料との出会いはどんなところなのですか？

夏目：これは、ちょっとしたところで、京都に住んでいた時に近くにあった路面の雑貨店のようところで売っていたものとかです。

私の手法としては、手芸店で売られているような「これは、このようにして使いましょう。こう使ってくださいね」というのではなく、思わぬところにあった思わぬものを、どう料理してやろうかというところに、勝手に快感を感じているのかもしれませんが。

京都に住んでいた時に、古着屋さんがたくさんあったので、そこにあったワゴンセールの帯です。

赤木：耐久性とか、丈夫さとか、持ちやすさとか、機能面に対する配慮はどうですか？

夏目：アイディア重視でどんどんやってしまうのですが…。母からも、こういうものを見せると、「チャックがないとダメね」よく言われます。まず、壊れたりしたら、リメイクをしたらいいということを前提で作っています。また違ったものに生まれ変わる。それはそれで楽しみがひとつ残っている状態が楽しいです。

赤木：これは全部ミシンですか？

夏目：ミシンです。ミシンが入らないところは手縫いです。

大内：ものを作るというのは、子供も大好きじゃないですか。子供を対象にしたワークショップ等は行ったりするのですか？

夏目：やはり河野さんと一緒にの仕事で、子供服のリユースショップを子どもたちと一緒にワークショップで参加しながらお店と一緒に作りましょうというコンセプトでやったことがあります。

大内：ものは買うのではなくて、作れるんだとい

う経験が子供の時にあるかないかでは全く違いますよね。

夏目：これが託児所だったところをリユースショップにしようということで始まったのですが、子どもたちと一緒に作っていくと。試着室も小屋風になっていて、そこの屋根を一緒に塗っているところです。什器も一緒に塗ったりしました。また、子供用のトイレも設けて、そこを草むらをペンキで塗ってみようとか。



大内：子どもたちが、真剣な眼差しですね。

夏目：そうなのです。この方は家具職人さんで、いつも一緒にお仕事をさせて頂いているのですが、この時には先生になってもらって、子どもたちと一緒に手を動かして下さったという形です。この辺りはもう完成しています。これは、先ほどあった木の形です。これをそのまま上から吊って、森のなかを想定しています。



大内：すごくいいですね。

夏目：これはなつめ縫製所作のサインです。布で旗を作って、試着室と、事務室と、トイレとレジの旗を作って店内に掲げました。トイレはこんな感じです。北欧の森のなかというのがお店のコンセプトなので、草むらのような感じにしています。

赤木：子どもがやっていますが、デザインは誰が行っているのですか？

夏目：デザインは、私と河野さんでやって、そして子供にもできるようにシンプルな作り方でワークショップで子どもたちでやってもらい

ました。

赤木：下書きはなしですか？

夏目：この場合は、マスキングで最初に私がテープングしておいて、その隙間を子どもたちがペンキで塗ります。やはり、「草を描いてね」というと、難しいので。「テープとテープの間を塗ってくれ」というとできるのです。

赤木：なるほど。

大内：これは楽しいですね。

夏目：縫製という注文は出てこなかったのですが、楽しかったです。最後に、お土産として私が小さな袋を作って渡してあげました。延べ100人位来ていただきました。ちょうど夏休み時期だったので。

赤木：どのくらいの期間がかかったのですか？

夏目：期間は、施工を始めて1ヶ月位です。

大内：1ヶ月の間に子どもたちが入れ替わり立ち代りという形だったのですか？

夏目：子どもたちは全6回分のプログラムを設けました。今日は枝を作りましょうとか、棚をみんなで塗らしましょうとか。1回あたり、15名くらいの参加があったと思います。

大内：20名近くになると、ヒッチャカメツチャカになるのではないのでしょうか？

夏目：最初は5名程度の参加を想定していたのですが、参加希望者が多く、そうなると断れないので、急遽プログラムを増やしたのです。

夏目：実はここで雑貨もおいてくれませんかとか、私に声を掛けてくださって、試験的に雑貨を販売しています。今度はオリジナルのエプロンを企画して作ろうというお話になっています。

大内：このショップは、どこにあるのですか？

夏目：海浜幕張の駅のすぐ近くにあります。

赤木：何という名前のお店ですか？

夏目：「OSAGARI」です。すごくお店が可愛いんです。

赤木：これは、水性のペンキですか？

夏目：色付きの柿渋です。ですから、手についても全然安心です。子供向けのワークショップには打って付けです。

赤木：何色もあるのですか？

夏目：20色位あります。

赤木：やはりブラウン系を中心に行っているのですか？

夏目：グリーン系もあります。柿渋の色は黄色も

ありますし、ピンクもあります。

赤木：柿しぶ自体はなんの役割をしているのでしょうか？

夏目：柿しぶ自体はニスの代わりをしていると思います。保護と量だと思います。

赤木：柿渋で紙を作っていますよね。結構丈夫な紙ができてましたね。

夏目：皮膚の役割もするのですかね。

夏目：これはディスプレイの木を作っています。子供服なので、子供のためにプレイエリアを作りました。

大内：北欧っぽいですよ。天井のブルーとかも。

夏目：これもワークショップで作りました。店内で使われている壁紙の残りを紙状にして、「葉っぱを作ってください」と子どもたちに説明をしてペタペタ貼ってもらいました。



大内：子どもたちは、葉っぱが青だということに抵抗を示しませんでしたか？

夏目：全く示しませんでした。柵に余った木をつけてあげました。これが試着室です。試着室の屋根に屋根瓦をつけました。使用中という表示も手作りです。

こちらが子供用のトイレで、こちらが大人用のトイレです。

夏目：子どもたちが塗ったので、ところどころ斑になったりしているのですが、それはそれでまた味があります。

赤木：使われている色が、ある範囲の中に納まっていますから、ちゃんと良い調和した空間になっていますね。

夏目：壁紙の色は、私達から提案するのが大半ですが、この壁のブルーについては、最初はもっと地味な色だったのですが、「ここはもっと挑戦してもいいですね」ということで、このブルーに決まりました。お施主さんからもイメージを頂いて作り上げていきました。

このトイレは可愛く仕上がっていますが、元々は、子どもたちも怖がるような鬱蒼とした感じに作ってくれと言われたのです。それ

で、このような少し暗い色を使っているのですが、さすがに動物も出てくるし、あまりやり過ぎるのもなと思い、丁度良い所で止めておきました。テーマは鬱蒼とした森です。

赤木：これはグリーンですか？

夏目：はい、モスグリーンです。

赤木：光の感じも、照明もいいですね。これは行ってみなければ！

大内：私は、小学生とかが壁画とかを描くというのは、公共の場に置くものではないと思って、大嫌いなのですが、このようにデザインがきちんとされていて、指導する人もいて、というのはとてもいいと思います。自己満足に終わらずに。

夏目：子どもたちにも自由に発想するところもあって、でもそれは予めきちんと準備しておくということで計画しました。最初にやった枝のワークショップが、切る角度や長さはこちらで計画をしておいて、後は自由に塗ったりつけたりしてねとしました。すると、規則的な枝の並べ方ではなくて、自由な発想でその子なりの枝を作ってくれました。一つの枝ですが、とてもおおらかな感じがします。

赤木：これはどうやって貼り付けているのですか？

夏目：これはボンドと細いビスです。簡単なパーツと作り方でいろいろな表現になります。

吊り下げるので落ちてきたら危ないということで、最後に大人がビスだけを入れていきます。

赤木：落書き防止のために、子どもに絵を描かせる例がありますが、結構ひどい壁面画が出てきたりしますよね。

夏目：あれは、個人の判断でできるものなのですか？どこかに申請がしているものなのでしょうか？

赤木：公共の壁に落書きがすごいので、子供の絵を描きましようかと行政がどこかの小学校にお願いすることはあるようです。公共の景観の中に出てきた時には、これでいいのかと思ってしまうのですが、この事例の場合はある種やり方を制限して出していくことで、まとまり感の中に子供の自由な発想が出てきてますね。

大内：なんでも自由、でないところがいいですよ。ね。

夏目：先ほどの看板でも、3色の色を使ってという制限と、葉っぱを作ろうというルールがあって、大人にはない葉っぱが出てきてもまとまりがあるということなのかもしれません。

はさみでサクサク切れましたし、幼稚園児にも簡単に着ることが出来ました。また、店内に使われている3色なので、まとまりも統一感でもでした。

大内：この葉っぱは、子どもたちが置いていったとは思えないくらいに仕上がっていますね。

夏目：私は両面テープを貼ってあげる係りでした。

赤木：でも、本当にまとまって出来ていますね。

大内：子どもたちの顔が真剣ですね。

夏目：このワークショップの会は、これを埋め尽くそうねと言ったので、最後の方は、お母さんちょっと作って！という子もたくさんいました。

大内：これは写真を載せたいですね。こういう活動をしましたということ。

夏目：これが天井に使ったブルーの壁紙です。こちらがトイレのモスグリーンの壁紙です。

ここにあるのが、筍だそうです。自由です。

夏目：そしてここに日めくりの看板を作りました。5日目・6日目とそれぞれテーマがあつてということです。

大内：海浜幕張にあるお店も行ってしまおうかなと思っています。海浜幕張のどのへんでしょうか？

夏目：幕張のベイトウンの中です。

赤木：色彩で特に気をつけているところはありますか？制作上でもいいし、日常的なところでもいいし。

夏目：何色を使つてはいけないということはないです。

赤木：ではまとめ方ということでしょうか。これなどもある種の色彩感覚を持っていないとできてこないまとめ方をしているのではないですか。

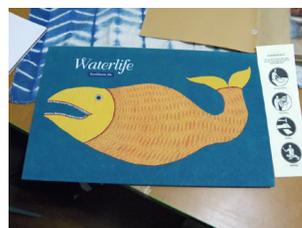
夏目：一見、変な色の組み合わせが好きです。これは友人にもらったネパールの布なのですがちょっと変わっていますよね。

赤木：普通、日本にあるものではないですね。

夏目：そういう、日本には普通無いようなものに対して、面白いなとか、綺麗だなと思って自分の引き出しに入れるということがあります。

大内：既成品が嫌いなのでしょうか。配色も自分で作らなければ嫌なののでしょうか？

夏目：確かにそうかもしれないです。こういう包装紙も綺麗だなと思いますし、これは私がお気に入りの魚の本ですが、はっきりした色が好きかもしれないです。



赤木：確かに、綺麗ですね。

夏目：インドで手摺りで作っているそうです。ハンドメイドブックです。あと、布なので、実際の布と合わせながら決めていくというのが一番です。

大内：やはり根底にあるのはパッチワークなのかもしれませんね。いろいろな素材や色をあわせて作り上げていくという。

夏目：私の祖母から、私の若い感覚でちょっと見て！というのが確かにありました。確かにそうかもしれません。私自身はパッチワークはやらずに、洋服作りの方ですが、柄と柄が基本ですから、確かにそうかもしれません。

大内：使つてはいけない色というのはなくて、色をどう組み合わせるのかということですね。

夏目：それだから、できるだけ多くの素材を手元においておきたいというのはそこにつながっているのかもしれない。素材にしても布にしても。

大内：デザイン事務所とかにあると、おしゃれですね。私達も早速買いましょうか？

夏目：アマゾンで買えますよ。

赤木：将来の夢は？個人の夢でも。今後作りたいものという質問もあるのですが、それは今の延長線上ということですよ。

夏目：本当に自分の個人的な夢なのですが、自分には息子ができると、決めてしまっているのですが、その自分の息子の野球の大会に旗を持って応援に行くというのが夢です。

赤木：手作りの旗を持って？

夏目：はい。手作りの旗で、頑張つて！と書いて。

大内：わかります。あれは楽しいですよ。

夏目：私には兄がいるのですが、小さい時一緒に剣道を習っていました。小3くらいで道着を着て、竹刀を持って二人で写っている写真があるのですが、こういう家族がいいなと。そういうのが夢です。旗を持ってお弁当を持って応援に行くというのが夢です。

赤木：繊細で、丁寧なお仕事だと。あと丁寧に生きていますかと思いました。

夏目：あと、河野さんと一緒にお仕事をさせていただくようになってから私も変わってきました。元々自分のものを作るという、自己満足の中でやっていたのですが、誰かの生活の一部を作るのだと思うと、やはり丁寧な仕事をしたいと思いますし、どんどん時間を重ねていって、変わり続けることが素敵だなというのが最近わかってきました。

赤木：共同で作る、先方の意向を聞きながら作っていくということと、自分のこれまでやってきた自分だけの表現というものがあって、そのバランスというか並行的なものなのか、将来的にクロスしていくのか、自分の中でそういう実感のようなものはありますか？

夏目：今までは、幸いにも自由にやってくれと行ってくれる方が多かったのですが、それでもやはり、お互いの意見を聞きつつ、私の表現をこっそり入れましたとか。見えないところに少し遊んでみましたとか、自分の表現をすることはあります。ぶつかるということは今まではないですね。

どこかひとつは、なつめ縫製所の印を残してやろうということを企んでいます。これは考えていなかったけれども、面白いねと言ってくださる方がほとんどでした。

赤木：手作りだから、マスプロの考え方は一致しない部分があるのかもしれませんが、日本人はプロダクトアウトのような自分がほしいからどんどん作ってしまう。だけれども、マーケットは受け入れてくれないというのがあって、すると今度はマーケットインだということになり、マーケット情報を知っていこうよということになる。だけれども、マーケッ

ト情報だけだとものが作れないところがある。なんとなく、手作りとマスプロの違いはあるのだけれども、丁寧なものの作り方が、マスプロの中にも役に立っていくのではないかと思います。これまで、日本の低迷時期が家電然りで続いていて、ものづくりの方法、日本が昔培っていたものがどこかに行ってしまった。手作りの考え方が、なにかヒントになるのではないかなという気がします。その辺の塩梅をどう思われていますか？

夏目：全て手作りのものをというのは無理でしょうけれども、きちんと相手に届くものを作るという考え方だったり、何も手で作ったものもいいということではなくて、機械で作ったものも、ゴミを作らないところだったり、ものを作るということは、資源を使うことなので、資源を無駄にしない。本当に擦り切れるまで使ってもらえるようなものを作るとか。そういうところですか。

赤木：ものが入っているパッケージで、捨てなければならないものはたくさんありますからね。

夏目：作り手側のエゴだったりで、でもただ捨てられるだけというのは多いかもしれないですね。そういうところは、何に対しても疑問があります。

赤木：話を伺っていて、非常に丁寧なものづくりの感覚がいいなと思いました。

大内：そうですね。服作りを通して、生き方とか、時間とかを人と一緒にデザインしていくのだなというのがよくわかりました。

赤木：プロダクトというのは元来そうあるべきものだと思うのです。大量生産品であってもです。

夏目：そうなってくると、いつも難しいなと思っているのが、何をされている人ですか？と言われるときに、ものを作っているわけではないので、服を作っているともカーテンを作っているとも言えない。でも、そういうところが本質なのかもしれません。

赤木：お話をお伺いできて良かったです。ありがとうございました。